日本アンダーライティング協会

第70回教育講習会

がん診断と治療の進歩テーマに

日本アンダーライティング協会は2021年10月27日、第70回教育講習会をオンラインで開催した。講師にミュンヘン再保険会社シンガポール支店チーフメディカルオフィサー、アジア太平洋・中東・アフリカ地域（生命・医療）担当のアンドレアス・アルムス氏を迎え、「がんの診断と治療の進歩：引受査定および保険金支払査定への影響」をテーマに解説した。当日は173人が視聴した。

アルムス氏

講演に先立ち、日本アンダーライティング協会の岡崎理事が、講演者のアンドレアス・アルムス氏の略歴と当日の講演内容の概要を紹介。その後、アルムス氏が、講演内容の構成と三つの注意点について説明した。がんの診断と治療の進歩が、生命保険事業に与える影響について、直近のがん診断技術と治療法を概観したうえで、まず第１に「がんの既往歴のある方の保険加入率を高められるか？」、第2に「消費者のがん罹患知識が高まることで、逆選択等で保険金請求件数は増加するのか？」、第3に「引受査定や保険金支払査定の実務に対する影響はあるのか？」といった3点を説明した。

まず、がん診断の進歩について説明した。遺伝学・ゲノミクスに基づく血液中のがん細胞やDNA断片を検出するリキッドパイオプシー、イメージング、Cyrcadia®のIT Braなどの新しいスクリーニング装置などの革新的なアプローチについて紹介し、各々の詳細について説明した。

保険金支払査定への影響など解説

リキッドパイオプシーの進歩によって現在起こりつつある問題＝直接個人に検査結果が交付されるようになっており、罹患リスクについて医療機関を介さずに消費者が知ることができる。このことは従来の告知では保険会社には開示の必要がないことに注意しなければならない。

乳がんのスクリーニングに使用されるCyrcadia社のIT Braは、消費者が簡単に乳がんに罹患しているか、発症確率が高いかどうかが、AIにより解析され、本人が同意すれば、結果を医師、保険者、家族と共有可能だ。

また、IBMによる次世代のコグニティブ・コンピューティング・システムが開発されている。この医療画像分析により、例えばマンモグラフィ検査結果からシステムが乳がんの診断結果を下すようになることが予想されている。それ以外にもX線血管造影における冠動脈狭窄やさまざまな画像診断をシステムが行うことになる可能性がある。

次に、がん治療についての進歩について、免疫療法と標的療法について説明した。免疫療法は、がんが免疫システムを逃れる仕組みを阻止し、免疫システムががんを「発見し」、攻撃するのを助ける治療法。標的療法はがん細胞内に存在しがん細胞を生存させる特定の異常に焦点を当て、腫瘍の増殖と全身への転移を助ける特定のタンパク質を阻害することで、がんの治療を助ける治療法だ。

2020年に米国で発見された腫瘍学の新規活性物質は20近くあり、これらは臨床現場での免疫療法および標的療法に使用されるようになっている。

休憩をはさみ後半では、引受査定と保険金支払査定への影響について説明した。

まず、冒頭で紹介した第1の注意点＝がん罹患者の引受について説明。がんの既往歴を有する被保険者の死亡保障リスクの引受能力を高めるためには、長期的な死亡リスク（がん治療による副作用のリスク、および進行や再発のリスク）や二次がんリスクを大幅に減少させることが必須となる。実際に肺がんにおける免疫療法と従来の化学療法での生存率の比較が説明されたが、現状では生存率にこそ差は出ているものの、生命保険の引受に効果を及ぼすほどの改善はみられていない。また、標的療法および免疫療法には重篤な副作用が起きる側面があり、それらが保険金支払に影響を及ぼす可能性があることにも注意しなければならない。

現時点では標的療法や免疫療法は、化学療法もしくは放射線療法、またはその両方に付随して行われ、転移などの進行したがんで使用されている。そのせいもあり、現時点では大半のがんにおいて、生存率の改善は数週間あるいは数カ月に限られている。これらのことから、がん罹患者の引受が改善されているとまでは言い難い状況だ。

次に、冒頭での第2の注意点について、特定疾病保険の支払事象の発生率の上昇は、（少なくとも部分的に）スクリーニングの実践および逆選択の機会による影響を受け、死亡保険金支払の増加は、（少なくとも部分的に）逆選択による影響を受ける。最適なスクリーニング検査（Cyrcadias®IT Bra）によるがん発生率への影響は、スクリーニング後の浸潤がんや転移がんの発症が抑制されうる可能性があるものの、現実には効果が出ない（＝浸潤がんや転移がんが減らない）場合も充分に想定される。

また、がんの分類について、従来は顕微鏡による病理学的検査が使用されてきたが、今後は分子的類似性に基づいて遺伝学視点に基づいてヒトの腫瘍タイプを分類していくことが進んでいくと思われる。すでにThe Pan-Cancer Atlasは始まっており、特定疾病保険に影響があるだろう。腫瘍の診断および予後分類が変化するにつれて、リスクと保険金支払の査定が著しい変化に直面し、定義文言、引受査定や保険金支払ガイドラインそれぞれの変更が予想される。

結論として、①がんの診断と治療の進歩は、臨床的な視点を変えるだけでなく、生命保険事業にも（著しい）影響を及ぼす②現在はがん治療の進歩により、がんの既往歴を有する被保険者の保険のリスク引受能力は増加しておらず、将来がん治療の進歩が保険リスク引受能力に影響を与えるかどうかは不明だ③新しいスクリーニングの適用および機器は、予想外の発生率増加や逆選択などの深刻なリスクをもたらすため、注視すべきだ④将来がんゲノミクスは、特定疾病保険の引受査定と保険金支払の慣行を変えていくだろう―とまとめた。

受講者からは「The Pan-Cancer Atlasによるがんの病気分類は、現行のTNM分類による病気分類と比較して、大きな差が生まれてしまう可能性があるか」「顧客による自主的なスクリーニング検査による逆選択は告知義務違反の立証を困難にするが、保険会社としてどういった対策が考えられるか」といった質問が寄せられた。

（文責：ミュンヘン再保険　鈴木淳夫）